

和ひとけたの頃といえ、たとえは校本を作るにしても、校本用の底本が比較的やすく、木版本などで求め得ない限りは、群書類従の版本などをすらも筆で影写して校本用原本とし、さらにそれを一枚ずつ青写真に焼いて何部ずつか作って何十本もの校合に用いるというようなことからはじめて、いろいろお金のかかることが多いものだから、京都へ蔵書拝見に行くとしても、東京から十二、三時間かかる夜行列車（当時は特急「つばめ」もなかったし、かりにあっても特急料金を節約して乗らない）で出かけ、大病院前の入院待ち患者用の安宿とか、本願寺近辺の信者用の常宿とか、そんな所に十日か半月は泊って、大学とかお寺とか個人のお宅とかへ通って、見せていただき、校合させていただいたりしたものである。だから、ある中古の物語の諸本調べに東奔西走していた私の一人の友人などは、宿泊費を節約するために、すべて夜行列車を使って、とうとうからだをいたため、卒業論文は草稿で辛うじて出しはしたものの、卒業間もなく亡くなってしまった。そんな苦勞を重ねての調査であり校合であるのだから、たしかに若人としては、殊に然るべきお方の紹介状

を持って伺った相手の蔵本主が、見せるのを渋ったり拒んだりすれば、なさない気持ちになるのは当然だけれど、御蔵本主としてみれば、そのとき、それなりの何かの、またはいろいろの御事情もおありになったのだから、黙って引きさがるよりは外はない。決してうらんだり、おこったり、まして「学問研究の敵」などとのしることなど、してはならないはずのことである。事実、又いつの日か、その蔵本主が快く見せてくださる日がめぐってこないでもないとするれば、自らその望みを放棄するのは愚の骨頂である。以上は昔の「学生」の所業に対しての思い出から引き出された私の感想であるが、この稿の「読者」の皆様の指導下にあられる学生諸君への「御注意」のおりにお役立たせ頂ければ、とふと思つて記しておく。

なお、これはまったくの老婆心から、卒直に一言つけ加えさせて頂くなら、右のように「個人」の研究のために、ヒトサマの蔵本を見せて頂くときには、このごろのとかく無作法・非常識を非難される「学生諸君」だつて、かの「無頼漢」君のような言動は、むやみにするはずはないけれど、これがたとえば「資料館」と

いう、公の機関によって委嘱された「調査員」に同行して、調査員の私的な「助手」をしようとしような場合には、ひよつとするとその「学生」は、公の仕事、国家的・公的事業を自分は行なっているんだというような、一種のほこりとおごりの心で、ふと無作法をおかすことはないといえない。学生を助手として同行されるときは、嚴重に、「常識」について親切丁寧に解説しておかれることが望ましいようである。

二、拝見の手つづき

さてヒトサマのお持ち物なのだから、見せて頂くのには、当然一とおりの手つづきが必要であり、その手つづきの踏み方如何で、見せて頂けるものも見せて頂けなかつたり、逆に見せて頂けないはずのものが見せて頂けるようになったりするから、慎重であらねばならない。

といつて、もとよりむずかしいことでも何でもなく、一言でいえば、見せる相手の気持ちになつて行動せよ、ということである。それについて――。

をそのために明らかに浪費するだけだということへの配慮が肝要たるべきこと。

御自分の蔵本を、相手によつてそれが何であり、どれだけの学問的あるいは市場の価値があるかということを持て判定してもらおうとの意図を持つておられるお方ならいざ知らず、普通は、見せればいたむばかりで、よいことは何も無い。まして見せたあげくが、その某氏の蔵本は、これこれしかじかで不良本であるなどと、後日天下に公表されるだけだつたとしたら、まさにバカみだいなものである。だから公共図書館の蔵書は別として、個人の御蔵書については、善悪良否を論定して記すときは、その表現のニュアンスに、きびしく心を用いなければならぬ。また公共図書館・文庫の場合でも、一般閲覧者として閲覧するのではなくて、係の方に刺を通じて特に便宜をはかつて頂いた場合などは、それなりの心用いをするべきことは言うまでもあるまい。こうした用意を怠ると、その拝見者個人が、蔵本者から爾後嫌悪されるだけではなく、後日・後年に拝見を希望する人たちが迷惑させられることは、前述の「無頼漢」君の場合と全く同じである。

蔵本主の時間を浪費させて御迷惑をおかけすることこそ、近ごろのように入人手不足の時代においては特に大問題であろう。何しろ、文献資料の調査は、ちらつと見てすむというものではない。一冊の本を調べ、覚え書きをとり、さらに二、三枚の写真をとらせて頂くというだけでも、小一時間はかかるというもの。まして十冊、二十冊の御本拝見ともなれば、弁当持参で、午前から夕刻近くまでも（あちらさまが許して下さいならば）かかって、なお数日にわたるといのが普通である。その間、御蔵本主のかわでは、ことにそれが貴重な御本である場合などは、当然、拝見者がわの人々の拝見の様子を見守っていられるであろうし、又、拝見者がわでも、そうして見守っていて下さらないと、あとで万一、あの一葉が切り取られていたとか、この表紙がなくなっていたとか、いふ問題がおこったとき、申し開きができなくなるおそれがあるから、ぜひとも、どなたかが、ずうっと立ち合っていて下さることを切望する。というわけだから、見せて下さるがわの御迷惑は大変なものである。私の親しく知っているある格式の高いお寺の主の方がが笑いをうかべつ

つ私に話したことがある。「寺累代所蔵の本を見せてくれ」といろいろな人が来るのを、学問研究のために協力してさし上げるのはよいが、打合せた日を、勝手にずらせて来て、しかも見せるのが当然だといわんばかりに強請したり、日が暮れかけても平気で帰らなかつたり、腹が立つようなことが、間々ある。「学問研究」といふ錦の御旗に甘えすぎているとしか思えない。ことにこの頃は人手がなくて、そのお人に本をお見せしている間、私は、そばにいななければならないので、私のつとめの方は代りをする人を頼むのだが、それへの報酬もバカにはならないのですよ」と。

いろいろなお世話になった謝礼金の類は、たとえばその杜寺のわの方が、いわば「調査補助員」として積極的に調査にたずさわって協力して下さった場合に、がしかのお金を「支払う」（もちろん「受領書」を必要とする）以外は、認められなくて、まことに難渋したことであつた。現在、もつと融通がきくように改められているかも知れないが、もし先年のままであるならば、こうした杜寺・個人蔵書家の御本拝見調査についての「礼金支出」に関しては一日も早く適正な考慮が払われなければ、誰も、どこも、見せてくれなくなってしまうこと必定であろう。

だが、文学関係の書写本となると、そうどこらにでもあるというわけにはいくまい。だから由緒ありげな素封家らしいお邸からぶつかつてゆく手しかないようであるが、もちろん、えたいの知れない男たちが、だしぬけに参上しても、相手にしてくれない可能性はまずない。やはりその土地で信用のあつた有力者などからの口まきが必要であり、その有力者は、その府県庁のおえらい方などから紹介して頂くというのが定法であろう。つまりえたいの知れない男ではなく、えたいは知れている男であることを相手にみとめて頂くのが第一歩であるが、その場合、何でもないとこのようではあるが、肩書付きの名刺は絶対に必要のようである。安心感と後日のための証拠を、相手のお方は望まれる。従つて「肩書」はペンで書き入れたのなどは、胡散臭くて逆効果がある。ついでにいえば、「国文学研究資料館文献資料調査員」という肩書には「国立」を冠して印刷なさるべきだと思う。正当な称でないから気になるというお方は（国立）というふうに入弧に入れてでもよいから是非冠せられたい。とりわけ地方では「××資料館」の名を掲げながら、全くその名に値しない、個

人経営の商店の類が少なくないから、「国立」ぬきのそうした名刺の肩書を見ると、連想が必然的にそちらに馳せてしまつて、軽くあしらわれる惧れ十分である。その際「国立」クニタチとよむのかな、などと気がまわる人は稀だろうから、そちらの心配はなからう)の称は、相手に安心感を与えること絶大であり、所期の目的達成にも大きい力となることは確かである。

さてそうしたお邸で何か見せて頂こうとする場合は、これも地方史研究の学者の話だが、ひたすらに相手をごちらに親しみを覚えて下さるようになり、相手が興味を覚えそうないろいろな話をし、時には土産に持参の一升瓶を傾けつくして語り明かすというような関係にまでなつて、やつと、日頃使わぬ土蔵の中の文書類をさがし出してきて下さるといふ段取りになるのがむしろ普通で、一軒の調査に四、五日ずつはかかるのだそうである。文学書の場合は、事情がちがうけれど、ともかく快く見せて下さる雰囲気を作るために誠心誠意努力すべき点では同じことである。見せて頂いた場合、その拝見のし方に作法があることはいうまでもない。ペン・ボールペンの類は使つたな

枚の繰り方に注意しろ、写真撮影には強い光を直射させるな、などなど、初歩的なことながら、若い学生諸君を補助員に連れてゆくときには、念を押す必要がある。ことに、できるだけ指面を紙に当てないようにするとか、特に貴重本については、息をつめて拝見するとか、これらも常識ではあるが、学生諸君には言つておくべきであらう。先年の晩秋、あるお宅で国宝級の御本を拝見したとき、その御主人が、「この夏休みに、某大学の大学院の学生が、然るべき方の紹介状を持つて、見せてくれといつて来られたのでお見せするにはしたが、その学生さんが、暑い道を歩いて来たせいか、汗が十分おさまらないのに、いそいで、しめつた手で本をさわわり、顔をのぞかせて本に見入るので、額の汗が紙の上に落ちはせぬかと気が気ではありませんでした」といわれたが、恐らくこの御主人は、少なくとも夏には貴重本を見せることは、もうなさらないであらう。

御本を丁寧に拝見するということは、御蔵本主に安心感を与え、自然好意を呼びおこすもので、拝見者の態度次第では、御蔵本主自身、それまででは見せるつもりはなかったもの

までも見せて下さることさえ往々にしてある、ということ(計算に入れるべきことではないが)、心得ておきたい。そんなことは、個人の蔵書家の場合だけのことでなく、たとえば、先年科研補助金による文献調査の仕事で、私共二、三人がある中都市の市立図書館の蔵書拝見に行つたとき、事前にその館長に親しい土地の有力知識人のお方からよく話して下さつてあったので、館長は大変

快く会つて下さつて、特に館の応接室を私共の専用にさせて下さつた上、こちらのお願する本を続々と運ばせて、自由な調査に委せて下さつた。まさにこれこそ最高の御好意と感激して、閉館二十分前ぐらいに、いちおうかたづけして、万謝言上、掃京、その後も、日帰り又は一泊で、再三回拝見調査に赴いたのであるが、その三度目のころ、館長は、私に、「打ち明けていえば」といつてこう言われた。「たいいてい偉い方の御紹介で来る人は、山のように出させた本を、ちよつとひっくり返して、ちよこちよこメモを取つたくらいで、あつさり引き上げていらつしやるのが普通なので、あなた方もどうせその同類と思つていたのだが、こんなに一冊一冊丁寧に細かに調べなさるのに

驚いた」と。そして、「実は未整理の本が若干あるが、それも見たのなからお見せしよう」とて、思いがけない、いろいろな珍しいものを調べさせて下さつたのであるが、なるほど、拝見の態度が、こうして蔵本者の方々を和ませ、さらに格別の御好意をまでも生み出すものかと、恐ろしさをさえ覚えたことであつた。

第三に、拝見の事後処理について。拝見している間に、蔵本主から調査結果をあとで知らせてくれとか、調査書目とその簡単な解題でも報告してほしいとか求められることもあつた。又、時にはこちらから、その場でわかりかねたことを掃り次第調べてお知らせするなどお約束することもあつた。そうした場合、掃つて早々、予定通りにはそのお求めなり約束なりを果すことができにくいことが多いのは、あなたが私ばかりではあるまい。掃つて半月ぐらいのうちには、などと申し上げておきながら、極端な場合は一年近くおくれってしまったりする。こうした場合、必要なことは、そのお約束した期限を過ぎないうちに、「事情」を述べて期限延期の要請の手紙(「はがき」は失礼であるからいけない)をさし上げることである。悪事情が重なつて、

あるいは再延期・再々延期を要請することがあるかも知れないが、その都度、無断で違約することだけは、決してしてはならない。又、お約束して来ながら、こちらの見込がいで、御返事不可能のこともあるが、それは、それなりに即座におわびの手紙をさし上げたらよいのである。

それから、こんなことは小学校の生徒に対していう「注意」みたいで恐縮至極であるが、個人蔵書家であれ、公共図書館・文庫であれ、調査に伺って、なにかお世話になった方々には、調査を終えて帰宅したら、即刻、御礼の手紙（これも「はがき」はいけない。まして「電話」は絶対にいけない。相手の生活の時間に無断で闖入して、その生活を遮断せしめた上、呼びつけておいて、ただこちらの身勝手な礼言を聞かせるだけなどは、無礼のきわみだと、さる古老から教えられたが、私も至極同感である。親しい人以外、電話での「お礼言上」は避けるべきである）はさし出さなければならぬ。

帰宅早々、これは実は、大変なことではあるが、遅れることは許されな。やむなくば、旅中、寸暇を利用してでも予め書いておいて帰宅早々に投函するというような「策」を弄することも許していただけようか。

なお申すまでもないが、「調査」にさきだつて、そうした蔵書家、図書館、文庫などに紹介して下さったり斡旋して下さったりした方々に、調査終了のあとで、まず御礼の手紙をさし上げ、さらに、事情によっては向いて然るべき御挨拶を申し上げることを忘れてはならない。（案外、若い学生などでは、紹介状を書いて与えたあとで、でかけたのか、どうかさえもこちらに連絡せず、こちらとしては紹介先の方に対する責任感から、ひどく不安な思いに悩まされることがあるので、念のために記した。

紹介者・斡旋者はその被紹介者・被斡旋者からの報告によって、紹介先・斡旋先に、あとから又、挨拶するのが常識だから、報告をうけないと、まさに処置なしで困惑するのである。）

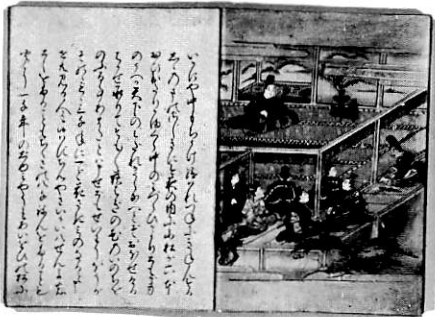
要するに、調査の対象となる文献資料のほとんどはヒトサマの持ち物なのだ。だから見せてくれといつても見せない自由がある。それをヒトが見せて下さろうとするのは、文献の公共性へのそこはかたない、しかし尊い御自覚があるからだ。その尊い御自覚をゆめ裏切らぬかどうかは吾々の文献調査の仕事の将来の成否をきめるのだ、というのに尽きよう。

（国文学研究資料館評議員
学習院大学教授）

新収資料紹介 ①

唐糸の草子

頼朝と義仲の争いを舞徳譚を軸に織りなした室町期物語で、豪華な彩色をほどこした大型奈良絵本である。刊本の伝来は古活字版から渋川版まで多数存するが、写本で伝存するのは、従来知られている限り、穂久邇文庫本と早大図書館本だけであった。ここに、第三の伝本を加えたわけである。



さて、当館本の書誌を記しておこう。

写本二冊。表紙は紺地、鳥の子、金泥の山水草木描。中央上部に、赤地に金泥の草木描の題簽が貼付、「からいと上（下）」と墨書。見返し、金箔。各冊ともに縦三センチ、横二十二センチ。本文料紙は、上質の鳥の子紙で、金泥の草花の下絵。用字は漢字交り平仮名書き。一面行数は十行。紙数は、上巻が十七丁（首遊紙一丁、墨付十四丁、尾遊紙二丁）、下巻が二十五丁（首尾遊紙各一丁、墨付二十三丁）。総数は、上巻が六面、下巻が六面の計十二面。土佐派風の絵で、絵具の剥落が少なく、極めて美麗である。当本の書写期は寛文年間は下るまい。江戸前期としておくのが妥当なようである。

本文は、内閣文庫蔵の慶長末年頃の古活字十行本（丹緑一冊本）とよく似る。既述の他二写本と比較もしていない故、断言はできないが、内閣文庫本以下の江戸初期丹緑本系統の本文の系列に位置するもの、或いは、その転写本とみてさしつかえはないであろう。

西ドイツの日本文学研究と 国文学研究資料館への期待

ブルノ・レーヴイン

今年の春に交換教授で東京に滞在したとき、国文学研究資料館を見学する機会があった。

私は西ドイツのボーフム大学で日本文語と日本文学を教えており、資料館の設置、組織及びその目的に関心を持っていたから、これについて二三意見を述べたいと思う。

国語国文という学問は、日本国内のみならず、外国でも所謂「日本学」の基本的な研究対象として、もう数十年も前から研究され、明治時代から発展してきたものである。現在では海外における日本研究者や研究機関の数も増し、たくさんの方に日本研究会ができた。昭和四十八年にはヨーロッパ地区日本研究協会も設立されている。このように日本語と日本文学の研究とは、世界的に普及しつつあるが、その一例としてドイツのヤバノロギー（日本学）の歴史をさかのぼると、元禄時代に長崎の出島で医者として活躍したケンペル（ENGELBELT KAEMPFER）を

の先覚者とみなすことができる。その有名な「日本史誌」は今でも重要な資料書である。十九世紀になると、

シーボルト（PHILIPP FRANZ VON SEEBOLD）が同じくオランダの医者として来日し、色々の分野に渡って研究して、「日本」・「日本植物志」・「日本動物志」などの貴重な研究書を著わした。これらのドイツ

日本学のパイオニアたちは文学の方面には特別の興味がなかったので、ドイツ人による日本古典文学の研究は明治後期から始まった。この分野の先覚者はフロレンツ（KARL FLORENZ）であった。彼はアストンやチェンバレンと同時代人で、大でドイツ文学と言語学を教えるかわら、日本古典を勉強して「古事記」を完全に、また「日本書紀」と「風土記」を部分的に独訳したのである。明治三十九年にフロレンツの著述した「日本文学史」が出版された。これは現在までドイツにおける基本的な日本古典の研究書である。

フロレンツは第一次世界大戦の時（大正三年）ドイツに帰り、後にハンブルグ大学の教授となった。このとき、彼が開設した講座が、ドイツで一番古い日本学の講座である。フロレンツ先生の後任としてこの講座を担当したグンデルト（WILHELM GUNDEBERT）教授も、現在のベヌル（OSCAR BENL）教授も日本文学を研究しながら、一方で日本文学の独訳を行った。これはこの大学の伝統となっている。

日本学はドイツの東洋学（ORIENTALISTIK）の一部門として発展し、ハンブルグのほかにはベルリンがその学問の中心になった。大学も東洋語学院も、また昭和元年に設置された日本研究所も、その方向で研究活動がなされていた。こうして、第二次世界大戦時まではドイツにおける日本学の講座は三つとなり（ハンブルグ、ベルリン、ライプチヒ）、ほかの大学でも日本語が習えるようになった。戦後、ドイツの日本学は五十年代に立ち直ったが、その中心は西ドイツにうつった。昭和三十二年にハンブルグの日本学講座が復活、その後ミュンヘン、西ベルリン、ボン、ボーフムにも講座が設けられた。現在では、日本学の教室はドイツ連邦

共和国と西ベルリンの十五の大学に有る。勿論、その中には日本語の入門コースしかない所もあるが、その外の大学では一般に日本の文化と現状に関する講義が行われている。現在が一番専門化された、広範囲な日本学のカリキュラムは、十一年前創設されたボーフム大学の中の東アジア学部に見出される。その研究所では、日本語学と日本文学の講座ほかに日本歴史と日本思想史の講座が設けられて、地理・経済・政治学関係の講義と研究が行われ、西ドイツにおける日本学のセンターとなっている。

西ドイツの日本学を内容的にみると、総合的な社会科学で、言語・文学・歴史・経済・政治・民俗等を含めて、日本の固有文化と現代の発展を研究の対象とする学問である。その研究の大部分が日本語の文献に基づくので、文献学の分野が重要な役割をつとめている。このため、いまにいたるまで日本語と日本文学の研究は日本学の基礎となっている。それ故に西ドイツの日本学には文学研究の役割が伝統的に大きいのである。フロレンツ先生から現在の若い研究者にいたる多くの研究者の手によって、日本の古典と近代文学に関する

る色々な翻訳・解釈・分析・比較の研究が成し遂げられた。古代の文学は、『古事記』から宣命、『続日本紀』に至る作品が、日本文学の中で取り扱われている。しかし、現在の関心はむしろ中世からの文学に向けられている。平安時代の文学に関しては勅撰集・歌論・日記及び物語についての研究と翻訳がある。この方面の代表的な業績はヘヌル教授の『源氏物語』の全独訳である。鎌倉室町時代では、西ドイツの日本文学研究者は、随筆・連歌・謡曲及び説話の研究に従事している。江戸時代の文学においても色々な研究があつて、主に俳諧と戯作と国学・漢学の分野が取り扱われている。近代文学になると、明治時代の小説ならびに短歌・俳句の復興と新体詩の発達が研究対象になった。現代日本文学研究は短篇小説の独訳を除外して、谷崎・川端・三島などの作家研究が主である。要約すると、西ドイツの日本文学研究は広い主題に渡っている。その例としてポーフム大学の東アジア学部に提出された日本文学に関する卒業論文のテーマをあげてみると、次のとおりである。竹取物語の道教の背景・咄本の研究（鹿の巻筆）・東海道名所記の研究（独訳と解釈）・トルストイの

日本文学に与えた影響・国木田独歩の初期著作におけるロマン主義・島崎藤村の新体詩・明治時代の短歌の復興・夏目漱石と写生文との関係・三島の『鏡子の家』の構造上の分析。他の西ドイツの大学の論文を調べるためには、アメリカで出版されたシユルマン氏の学位論文総目録（FRANK SHULMAN: JAPAN AND KO-REA DOCTORAL DISSERTATIONS BIBLIOGRAPHIE. ANN ARBOR 1970）とミュンヘン大学の日本文学研究室で作られたニュースレター（INFORMATIONEN・ZUR・JAPANOLOGIE 四冊 一九七一一一九七四）がある。

以上、西ドイツで行われている日本文学に関する研究について述べたが、この方面では国文学研究資料館に対する強い期待がある。実は国文学の研究は国内だけでなく、外国でも行われているので、資料館の活動を外国に延ばすことが望ましいのである。その活動は、大体研究情報部に集中するであろうと思う。たとえば、国文学者が「日本の詩」というテーマに関する海外で行われた比較文学的な研究の現状を調べる場合に、情報部はそのレファレンスができるべきである。他の例をあげると、ド



B. レーヴィン教授、当館の庭において

イツの日本学者が「江戸文学におけるヨーロッパについての表象」というテーマに関して探すと、資料館の方からその資料と研究文献についての情報提供ができるように、前もって用意すべきである。そのほか外国ではいろいろな特殊な研究分野に文献資料も研究情報も足りないもので、資料館でコピーして海外に送ってもらえたら、外国における日本文学研究のための真に大きな手助けとなるであろう。私は資料館は国内の日本文学研究増進の目的のほかに、国際的な責任があると思う。それは援助と刺激である。この意味において国文学研究資料館が国際的に知られ、国際的に利用される日本文学研究のためのインフォーマーションとドキュメンテーションのセンターになることを希望する。その方策を考えると、さしあたり次のようなものが挙げられると思う。

資料館の設置・組織・目的を説明する英文のパンフレットを海外の日本文学関係の大学と研究所に送るべきである。このパンフレットの一部分には国際的な協力を呼びかけて、資料館を海外にも利用されるセンターにするために、外国の研究所も専門家も日本文学研究に関するインフォーマーションをなるべく定期的に資料館に送ってくれるような広告を載せる方がよいと思う。これらの情報を国内の研究情報と一緒に電子計算機に入れると、本当の国際的な日本文学研究に関するインフォーマーション・センターとして発展するであろう。勿論、この海外に向けている活動が付加的な仕事を引き起こす。しかし、経験によれば、このような仕事は早く始めると、負担も大きくないのである。

国文学研究資料館はこの分野の世界唯一の研究機関である。日本文学に興味のある人々は、皆その設置を歓迎する。資料館によって長い伝統

のある日本文学に関する知識が益々広がって深まると思う。この発達は海外における日本文学の研究者にとっても望ましいことである。
(Bruno Lewin, Ph. D.
ボーフム大学教授、東亜研究所)

文献資料部事業報告

大久保 正

前号に引き続き、昭和五十年一月一日以降、六月末日までの事業経過について報告する。
本館発足以来四年目に入り、当初どしでも昭和四十九年度は、学界はじめ諸方面の協力により、文献資料の調査・収集に前年度を遙かに超える成果を挙げることができた。今後は一層の充実を期すると共に、開館に備えて所収文献資料の調査カードの整備・将来の研究計画等についても努力を傾注しなくてはならないと考えている。

文献資料収集の概況

昭和四十九年十二月末日までに、調査員の御協力を得て当部で収集し

本年八月まで、東京大学とルーラ大学との交換教授として来日された。「古代のアヤとハタの歴史」「六国史の研究」「二葉亭四迷に及ぼしたロシアの影響」などの研究がある。

たマイクロフィルム資料の概況は、既に前号で報告したが、さらに昭和五十年三月末日までに左記の図書館・文庫等所蔵の資料を収集することができた。

- 1 東京大学附属図書館(秋葉文庫) 「顔見世番付」ほか(継続中)
- 2 東京大学国語研究室 「役者福若志」ほか二一六点
- 3 広島大学附属図書館(福井文庫) 「文安千句」ほか一七六點
- 4 九州大学附属図書館(細川文庫) 「細川系図」ほか二〇五點
- 5 東洋文庫 「あこぎがうら」ほか六六〇點
- 6 宮内庁書陵部

新収資料紹介②

古学派の一集「誹学校」(仮称)

洒落・比喩の風体、あるいは化鳥風といわれる奇警・謎の俳諧が風靡していた江戸の俳壇も、其角沾徳を失って漸く変風の時を迎える。法師風の作者紙空を戴く「五色墨」(享保十六年刊)と「四時観」(同十八年刊)のグループがその推進者であった。前者は美濃派・伊勢派の田舎蕉門に接近して革新を図ったのに対し、後者は思想界の動向を反映させることによつて点取俳諧の旧弊を除こうとしたのである。以下に紹介する新収の資料「誹学校」(仮称)は、そうした「四時観」グループの方向を顕著に示して興味深い。

さらに強化され、五十一条にわたる俳諧の教誡を並べ、俳諧に淫して産を破るがごとき風潮を、
風月より家業は重し笠の雪
祇徳

と蔽に戒め、俳諧諷諷説を纏々と展開している——因みに、右は其角の句「我雪とおもへばかろし笠の上」による——。本資料「誹学校」は、寛保二年に門人古学庵鈍牛(八王子住)が相模方面に遊杖して、厚木に風月庵を結んだ折の記念集であるが、五書三経より採った五条目の教誡(元文五年祇徳在刊)と前掲「風月より」の発句及び
色欲教誡の唱句
鶯やあまり愛してこはれ梅
祇徳

「四時観」の領袖祇徳(前号水光)は、享保二十年「誹諧句選」を刊行、「誹風世々にかはるといへども、秀逸・堪能の句に至りては、新古更になし」と喝破、「誹諧も古文辞を用べし」と徂徠学をそのまま導入し、古学の額を掲げた——以後一派の撰集には必ず「古学」の二字を外・内題に付している——。俳諧の古学を修め、古文辞を用いて俳道を正すという姿勢は、元文六年の「一言庭訓」になると

を巻頭に配して、やはり遊俳の堅持すべき姿勢を説いている——「鶯や」の句については海寿「歌俳百人選」に興味深い逸話が記される——。以下八丁余にわたって相模方面の門人の春興句を収めるわずか十二丁足らずの半紙本で、保存も良好とはいえないが(題簽欠、「鄙筑波」影写本を合綴)、「四時観」派の研究には恰好の資料である。

「紫式部集」ほか二三点
国文学文献資料調査報告書の刊行

昭和四十八年度における文献資料調査員の調査報告に基づき、「国文学文献資料所在調査目録・昭和四十八年度」(A5判、一九六頁)を、昭和五十年三月刊行した。

昭和五十年国文学文献資料収集計画委員の委嘱

昭和五十年年度収集計画委員は、再任五名、新任五名、計十名の方々に委嘱し、四月一日付をもって発令された。

昭和五十年国文学文献資料調査員の委嘱

本年度文献資料調査員として北海道東北地区八名、関東地区二三名、中部地区一六名、近畿地区一五名、中国・四国地区一二名、九州地区九名、計八三名(うち再任四四名)を委嘱した。ほかに、本年度より、特定の調査事項について一年未満の特別調査員若干名を委嘱することができること定められ、六月末日現在三名を委嘱し、協力いただいている。

国文学文献資料収集計画委員会の開催

五月十五日(木)、本館会議室において本年度第一回の収集計画委員会を開催し、本年度の収集計画について

て報告し、種々有益なる助言をいただいた。

国文学文献資料調査員会議(総会)の開催

五月二十七日(水)、公立学校共済組合本部大会議室において総会を開催した。その次第は左の通りである。

一、開会の辞

二、館長あいさつ

三、議事

(1)昭和四十九年度までの文献資料調査収集結果について

(2)昭和五十年年度文献資料調査員委嘱について

(3)昭和五十年年度文献資料調査収集計画について

(4)当館からの要望

(5)事務連絡

四、研究情報部長あいさつ

五、特別講演「国文学文献資料の調査収集について」

六、国文学文献資料調査要領説明について

七、その他

八、閉会の辞

松尾評議員の講演は、文献資料調査の体験に即して具体的な指針を示したもので、一同多大の感銘を受けた。

関東地区調査員会議の開催

六月十日(火)、国立教育会館会議室において開催。各調査員より、本年度の調査計画について具体的な報告がなされ、また本館今後の調査収集計画について活発な意見の開陳があり、種々協議が行なわれた。

近畿地区調査員会議の開催

六月二十七日(金)、京都大学楽友会館において開催、当部からは松田が出席した。松田より、本年度の近

研究情報部事業報告

古川清彦

畿地区における調査収集計画について報告があり、それをめぐって各調査員から活発な意見の開陳、要望等があった。ここで提案された問題点については、他の地区会議における意見・要望と合わせて当部で検討することとなった。

昭和五十年度は情報室長・参考室長を古川が、情報処理室長を山中助教が併任することとなった。また田島一夫助教の昇任(四月一日付)、宮沢彰助手・星野雅英事務官の着任(ともに情報処理室)を見た。

以下、各室の順に事業報告をする。

一、情報室

情報室は各学会・大学・研究所・出版社等の協力を得て雑誌・紀要等約一〇〇〇種の収集を行っている。

これにより編集室で行なう「国文学研究文献目録」の編集に必要な文献の八割以上は収集される体制が整ったが、編集作業を促進し、前年度の論文目録を翌年早い時期に出版するためには、さらに収集の範囲を拡大し、すべて手もとの文献で編集作業が行えるようにする必要がある。その目標に向って努力している。

単行本研究書については、昭和五十年から若干の子算が認められたので、「国文学研究文献目録」の単

う漢字字種選定の基礎データ作成にとりかかった。

使用する漢字の字種および頻度は、使用分野によりかなり異なることが予測されるが、従来は、現代雑誌九十種の用語の頻度表（昭和三十七年国語研究所）、人名・地名漢字、法令・官報等の行政情報処理用標準漢字（昭和四十九年行政管理庁調べ）等も現在も日常使用されている漢字に関するデータだけである。

当館の使用目的はこれらとかなり異なるので、四十八年度に総索引作成テストに利用した『平治物語（上巻）』（日本古典文学大系）の磁気テープのほか、『椿説弓張月（前編）』（日本霊異記）（いずれも日本古典文学大系）および当館で収集したマイクロフィルム四五〇件の書誌データについて、計算機処理による漢字頻度表を作成した。その結果は、漢字字種数は三、八〇三であったが、頻度一の字が九四三、使用したJ E M三一〇〇漢字プリンタシステムPTT八〇〇ソフトプリンタで印字できなかったもの三八八字種であった。

現在、これにさらに手作業で行っている東洋岩崎文庫目録の書誌データ等に加え、『新字源』（角川書店）の検字番号順に配列して、常用の漢

字頻度と比較し、七月一日から発足した漢字字種選定委員会（委員長西尾光一氏）のもとで字種選定を行っている。

電子計算機の導入については、昭和五十年年度予算では、まだ建物の建築が間にあわないので計上されなかったが、五十一年度には情報検索委員会（委員長水谷静夫氏）の助言をいただいで準備を進めている。

*マイクロ写真室

マイクロ写真は、当館が収集したマイクロ写真フィルム（主として三十五ミリロール）を処理して、閲覧用ポジフィルム等を作製するため、昨年十一月から発足した。当初は、暗室や現像室等の整備、自動現像機（ミニコピーオートプロセサー）の調整テスト、職員の技術研修等の準備作業が必要であったが、本年二月から本格的にポジフィルムの作製を開始した。

四十九年度中にマイクロ室が内部で作製したポジフィルムは一〇四ロール（約一千件）であるが、このほか従来遅れていた分をとりもどすためにポジフィルムおよび紙焼写真本を外注によって作製した。また一部については、将来の複製製作用の第

二ネガをやはり、外注によって作製した。

五十年度に入ってから、マイクロ写真室では、まずDDフィルム（ネガフィルムからポジを作らずに直接ネガを作るもの、Direct Duplicating Print Film）による第二ネガ作製のテストを実施した。その結果、光源その他を調節したが、現在のプリンター（ミニコピーフィルムプリンターPR1）では、かなりの改造をしない限り、DDフィルムに対しては不十分なことがわかった。しかしDDフィルムはポジを経ないので、オリジナルに近い、品質の高い第二ネガが得られ、普通のフィルムと同様銀塩に感光させるので、ジアゾフィルムやカルバーフィルムと異なり、保存性もよいと考えられるなどメリットがあるので、今後もその利用を検討してゆくこととしている。

また、当館の撮影機を利用して、原本から撮影する仕事も開始した。現在その経験にもとづいて、文献資料のよりよい標準的撮影要領および仕様を作成するために、館内に設けられたマイクロ写真委員会で作成されたマイクログラフ写真委員会で作成された。従来は普通の活字図書を撮影するやり方に準じていたの

いて、統一されていない面があった。）

研究情報提供のおねがい

当館では文献資料収集と並行して国文学に関する研究情報の収集を行っております。具体的には新発表の研究論文・単行本の収集、学会発表や学会開催を中心とした学界の動き、新出資料の情報収集、図書館・文庫に関する情報、あるいは海外における国文学研究の現状把握などです。こうして収集した情報のうち研究論文・単行本発行に関しては、『国文学研究資料館目録』により、また学界の動きに関しては、『国文学研究資料館報』によって逐次現況を報告しております。研究情報部では、それらの情報源として、各機関・学会・出版社に対して、研究紀要・機関誌出版物等の寄贈依頼をしております。すでに各方面のご協力をいただき感謝いたしておりますが、ご不要のバックナンバーのご寄贈など一層のご協力方を切望する次第です。

なお、これらに関しましては情報室にご連絡ください。

建築の進捗状況について

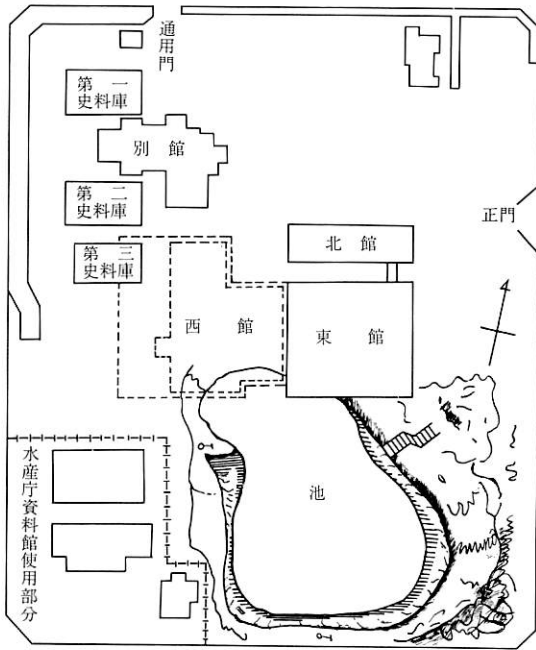
国文学研究資料館が、昭和四十七年五月に創設されてから、第一期工事として、まず鉄筋五階建て（地上五階、地下一階）の東館が昭和四十八年三月に完成した。

当初の計画では、引き続き増築工事（西館と呼称）を予定していたが、公共投資抑制策等諸般の事情のため今日まで工事を延期せざるを得なくなった。

しかし、ようやく本年度当初から西館地下部分（冷暖房空調用機械を

設置する設備機械室）の工事に着手することになり、現在工事は順調に進捗し、十一月下旬にはこの部分の竣工が予定されている。

当館の敷地および建物の現況は、次図のとおりである。



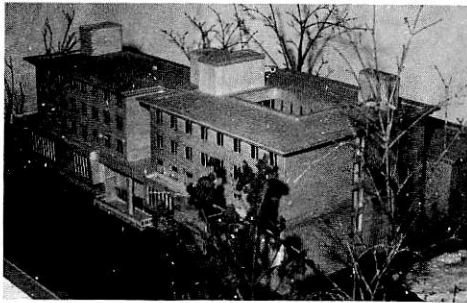
敷地 一四、七四六平方メートル
（うち一、三三三平方メートルは水産庁資料館に貸与）

建物 延面積 一、七六三平方メートル
五、四九三平方メートル

国文学研究資料館評議員会議 （国文学部会）の開催

昭和五十年七月十一日（金）如公会館において、国文学研究資料館評議員会議（国文学部会）が開催された。議題は、左記のとおりで、久松潜一郎会長はじめ九名の評議員が出席され、資料の調査、収集に関することをはじめ当館の事業について有益な助言をいただいた。

- 議題
- 一、本年度の事業について
 - 二、昭和五十一年度概算要求について
 - 三、施設の整備について



完成予想模型

国文学研究資料館職員名簿（抄） （昭和五十年九月三〇日現在）

| | |
|-------|--------|
| 館長 | 市古 貞次 |
| 管理部 | 吉野 幸夫 |
| | 金坂 勲 |
| | 宮崎 久敬 |
| | ※佐竹 良夫 |
| | ※生永 忠敏 |
| | ※新田三智也 |
| | 西村 瑞夫 |
| | 寺尾 昌剛 |
| | 三好 明 |
| | 福島 壮敏 |
| | 朝日向吉晟 |
| 文献資料部 | 大久保 正 |
| | 松田 修 |
| | 伊井 春樹 |
| | 福田 秀一 |
| | ※村上 学 |
| | 日野 龍夫 |
| | 杉山 重行 |
| | 徳田 和夫 |
| | 加藤 定彦 |
| 研究情報部 | 古川 清彦 |
| | 岡 雅彦 |
| | 本田 康雄 |
| | 田嶋 一夫 |
| | 山中 光一 |
| | 岩下 武彦 |
| | 和田 英道 |
| | 内田 保廣 |
| | 島原 泰雄 |
| | ※宮澤 彰 |
| 史料館 | 鈴木 寿 |
| | 鎌田 永吉 |
| | 榎本 宗次 |
| | 藤村潤一郎 |
| | 中村俊亀智 |
| | 原島 陽一 |
| | 大野 瑞男 |
| | 鶴岡実枝子 |
| | 井上 勝生 |
| | 浅井 潤子 |

（※印は新任者）

国文学研究資料館評議員名簿

麻生 磯次 (学習院名譽院長)

石井 良助 (東京大学名譽教授)

臼田甚五郎 (国学院大学教授)

大久保利謙

木村 礎 (明治大学教授)

児玉 幸多 (学習院大学長)

小葉田 淳 (京都大学名譽教授)

佐々木八郎 (早稲田大学名譽教授)

佐藤喜代治 (東北大学教授)

杉本 勲 (武蔵工業大学教授)

鈴木 忠直 (日本近代文学館専務理事)

手塚 富雄 (東京大学名譽教授)

豊田 武 (東北大学名譽教授)

中村 幸彦 (関西大学教授)

野間 光辰 (京都大学名譽教授)

久松 潜一 (東京大学名譽教授)

古島 敏雄 (東京大学名譽教授)

宝月 圭吾 (東京大学名譽教授)

松尾 聰 (学習院大学教授)

山岸 徳平 (東京教育大学名譽教授)

昭和五十年年度

国文学文獻資料収集計画委員会委員名簿

井本 農一 (お茶の水女子大学教授文教育学部)

木村三四吾 (天理大学附属天理図書館教授)

久曾神 昇 (愛知大学長)

五味 智英 (学習院大学文学部教授)

佐竹 昭広 (京都大学教授文学部)

神保 五弥 (早稲田大学文学部教授)

谷山 茂 (京都女子大学文学部教授)

橋本不美男 (宮内庁書陵部図書調査官)

山中 裕 (東京大学教授史料編さん所)

吉田 幸一 (東洋大学文学部教授)

昭和五十年年度

文獻目錄委員会委員名簿

浅井 清 (お茶の水女子大学助教授文教育学部)

大矢 武師 (初中局中学校教育課教科調査官)

久保田 淳 (東京大学助教授文学部)

篠原 昭二 (東京大学助教授教育学部)

瀬戸 仁 (初中局中学校教育課教科調査官)

曾倉 岑 (青山学院大学文学部助教授)

浜野 卓也 (東京都立桜町高等学校教諭)

山口 明穂 (白百合女子大学文学部助教授)

昭和五十年年度

情報検索委員会委員名簿

石綿 敏雄 (国立国語研究所言語計量部第三研究室長)

桜井 宜隆 (図書館短期大学教授文獻情報学科)

西村 怒彦 (工業技術院電子技術総合研究所、ターイン情報部数理基礎研究室主任)

水谷 静夫 (東京女子大学文理学部教授)

堀内 秀晃 (東京医科歯科大学教授教養部)

昭和五十年年度

漢字字種選定委員会委員名簿

稲岡 耕二 (東京大学教授教養学部)

岡 保生 (青山学院大学文学部教授)

諏訪 春雄 (学習院女子短期大学教授)

徳川 宗賢 (大阪大学助教授文学部)

西尾 光一 (山梨大学教授教育学部)

(当館職員で委員に指名された者を除く)

昭和五十年年度

国文学文獻資料調査員名簿

(北海道・東北)

長田 貞雄 (弘前大学教授教育学部)

家郷 隆文 (藤女子大学教授文学部)

菊地 靖彦 (一関工業高等専門学校助教授)

日下 力 (岩手大学講師教育学部)

高橋 伸幸 (札幌大学女子短期大学講師)

野田 昇雄 (北海道大学教授文学部)

松野 陽一 (東北大学助教授教養部)

山本 幸一 (釧路工業高等専門学校教授)

(関東)

浅野 晃 (共立女子大学文学部教授)

糸賀きみ江 (共立女子短期大学教授)

大井 善寿 (横浜国立大学助教授教育学部)

遠藤 宏 (成蹊大学文学部助教授)

奥野 純一 (筑波大学講師文芸言語学系)

木越 隆 (埼玉大学助教授教育学部)

- 小池 正胤 (東京学芸大学助教授教育学部)
 新聞 進一 (青山学院大学文学部教授)
 杉谷 寿郎 (日本大学文学部助教授)
 谷脇 理史 (跡見学園女子大学文学部助教授)
 津本 信博 (早稲田大学教育学部講師)
 鳥居フミ子 (実践女子大学文学部教授)
 長崎 健 (中央大学文学部助教授)
 野口 元大 (茨城大学教授教養部)
 長谷川 強 (埼玉大学教授教養部)
 富士 昭雄 (駒沢大学文学部教授)
 増淵 勝一 (立正女子大学短期大学部助教授)
 松本 寧至 (群馬女子短期大学教授)
 峯岸 明 (横浜国立大学助教授教育学部)
 室伏 信助 (跡見学園女子大学文学部助教授)
 森川 昭 (成蹊大学文学部教授)
 山田 昭全 (大正大学文学部教授)
 渡辺 守邦 (大妻女子大学文学部助教授)
 (中部)
 青木 紀元 (福井大学教授教育学部)
 井上 敏幸 (静岡女子大学文学部助教授)
 大久保広行 (都留文科大文学部助教授)
 岡本 勝 (愛知教育大学助教授教育学部)
 久保木哲夫 (都留文科大文学部助教授)
 後藤 昭雄 (静岡大学助教授教育学部)
 後藤 重郎 (名古屋大学教授文学部)
 島津 忠夫 (愛知県立大学助教授文学部)
 太刀川 清 (長野県短期大学助教授)
 長友千代治 (愛知県立大学講師文学部)
 西宮 一民 (皇学館大学文学部教授)
 長谷川 端 (中京大学文学部助教授)
 原田 行造 (金沢大学助教授教育学部)
- 樋口芳麻呂 (愛知教育大学教授教育学部)
 築瀬 一雄 (豊田工業高等専門学校教授)
 山口 博 (富山大学助教授文学部)
 (近畿)
 井口 洋 (奈良女子大学助教授文学部)
 伊藤 正義 (大阪市立大学文学部教授)
 大橋 正叔 (大阪樟蔭女子大学講師文学部)
 片桐 洋一 (大阪女子大学文学部教授)
 金光 洋三 (京都府立大学文学部助教授)
 雲英 末雄 (大阪女子大学文学部講師)
 桜井竹次郎 (園田学園女子短期大学講師)
 信太 周 (神戸大学助教授教育学部)
 鈴木 弘道 (奈良大学文学部教授)
 多治比郎夫 (大阪府立中之島図書館郷土資料課長)
- 野村 貴次 (甲南大学文学部教授)
 福田 晃 (立命館大学文学部教授)
 増田 繁夫 (梅花女子大学文学部助教授)
 水田 紀久 (関西大学文学部教授)
 安田富貴子 (橘女子大学文学部教授)
 (中国・四国)
 稲田 利徳 (岡山大学助教授教育学部)
 熊本 守雄 (山口女子短期大学助教授)
 志村 有弘 (梅光学院大学文学部助教授)
 鈴木 亨 (島根大学教授文学部)
 田中 善信 (高知女子大学助教授文学部)
 檀上 正孝 (広島大学助教授教育学部東雲分校)
- 友久 武文 (広島女子大学教授文学部)
 松原 秀明 (金刀比羅宮図書館嘱託司書)
 三角 洋一 (高知大学講師文学部)

- 山本 嘉将 (香川県明善短期大学教授)
 横井 金男 (広島文教女子大学文学部教授)
 横山 邦治 (九州)
 (九州)
 荒木 尚 (熊本大学助教授法文学部)
 石川 八朗 (九州工業大学助教授工学部)
 今井 源衛 (九州大学教授文学部)
 金原 理 (熊本大学助教授法文学部)
 田中 道雄 (鹿児島大学助教授教育学部)
 棚町 知弥 (有明工業高等専門学校教授)
 中野 三敏 (九州大学助教授文学部)
 米倉 利昭 (佐賀大学教授教育学部)
 笠 栄治 (福岡教育大学助教授教育学部)

◇編集後記◇

▼文献資料収集のために必要な心得について、松尾聰先生に、春の調査員会議の際のご講演をおまとめいただきました。

当館のマイクロフィルムによる文献資料の収集は、各方面のご協力によりほぼ軌道にのってきたように思われます。ただ残念ながら建築の方が大へんおくれれておりましたが、それもようやく今春から工事が開始されました。四月当館を訪問されたB・レーウィン教授も、当館に対する海外からの期待を寄せておられます。

▼当館で購入した原本二点について新収資料紹介を掲載しました。今後も随時継続して紹介してゆく予定しております。

受贈図書

(昭和五十年一月 昭和五十年六月)

(図書館・文庫目録等)

- 茨城大学所蔵古文庫漢籍分類目録
- 名古屋市鶴舞中央図書館所蔵総合増加図書目録第10集
- 岡山県総合文化センター所蔵増加図書目録第3巻
- 越谷市立図書館蔵書目録(昭和二八—四三年)
- 九龍市立図書館井上文庫資料目録
- 演劇博物館収蔵品図書目録
- 山形市立図書館増加図書目録
- 青森県立図書館蔵書目録(工藤文庫・米内山文庫・芸術篇、語学篇、能田文庫)
- 都立中央図書館蔵書目録(総記・社会科学)
- 大阪府立夕陽丘図書館増加図書目録昭和四八年
- 国立国会図書館所蔵朝鮮関係資料目録一九七五年
- 名古屋大学文学部国文学研究室所蔵国語学国文学関係雑誌目録
- 九州芸術工科大学増加図書目録昭和四八年
- 九州芸術工科大学増加図書目録昭和五十年
- 県立長野図書館蔵書目録第五巻総合書目索引
- 大阪府立中之島図書館増加図書目録昭和四八年度
- 大阪府立中之島図書館玄武洞文庫目録(2)

香川大学増加図書目録昭和四八年度

- 個人全集内容目録・続日本文学全集篇(東京都目黒区立守屋図書館)
- 高知市民図書館所蔵稀稀本展目録第一回
- 静岡大学附属図書館蔵書目録昭和四七年度
- 長崎県立国際経済大学増加図書目録昭和四九年四月—九月
- 市立松本図書館増加図書目録(一般図書・本庄文庫・郷土図書)昭和四九年
- 金沢大学図書目録第12巻昭和四八年度(昭和四八年4月—49年3月増加分)
- 特殊文庫目録(ノートルダム清心女子大学付属図書館所蔵)
- 愛知県立大学附属図書館蔵書目録(5)一九七四
- 石川県立図書館蔵書目録・社会科学篇1(昭和四九年三月現在)
- 東京大学東洋文化研究所漢籍分類目録
- 水産庁水産資料館所蔵資料目録
- 池田文庫増加図書目録第二〇号
- 大隈文書目録補遺・早稲田大学図書館和漢図書分類目録
- 原田織雄文庫目録・早稲田大学図書館文庫目録第六輯
- A Catalogue of Jounrion (maruhon and yukahon)
- 上野学園図書館特別展示目録

(図書)

- 橋守部の同学の-new研究(徳田進著)
- 宮部万女の人と文学(徳田進著)
- 波留渡日(木村三四吾編校)
- 梁鹿秘抄総索引(王朝文学研究会編)
- 万葉の歌人たち(古代文学会編)
- 広本略本方丈記総索引(青木倫子編)
- 更級日記総索引(東節夫、等編)
- 閑吟集総索引(高梨敏子、等編)
- 濱中納言物語総索引(池田利夫編)
- 署名のある紙(私)の書物随筆(一)(谷沢永一著)
- 屋代本平家物語 上・中・下巻(佐藤謙三、春田宣編)
- 江戸小説論叢(水野稔著)
- 標識のある迷路(谷沢永一著)
- 阿波文学碑考(藤井喬著)
- 「日本紀略」人名索引(梅光女学院大学編)
- 近代秀歌(福田秀一編)
- 酒井忠徳歌集(致道博物館編)
- 大きな捨て石に——前川須美江遺稿集——(前川須美江著)
- 河津英雲集について(太田品二郎著)
- 高崎正秀著作集第1—8巻(高崎正秀著)
- 日本古典全書 新訂萬葉集四・五(佐伯梅反、等校註)
- 作者別類、年代順萬葉集(沢沼久孝、森本治吉著)
- 古代日本文学思潮論1—4(太田善廣著)
- 萬葉集年表(土屋文明著)
- 万葉修辭の研究(山口正著)
- 万葉歌人の研究——文芸の創造とその表現——(山崎良幸著)
- 神奈川県史資料編18 近代現代(8)
- 近代の流通(神奈川県編)
- 戦国のロマン——北陸路、古戦場のぐり——(塩沼夫著)
- とやま弁にしひかし(太田栄太郎著)
- 越中の説話(京田良志著)
- 古代文学論叢第1—4輯(紫式部学会編)
- 口承文藝の展開(国学院大学文学第二研究室記念論文編集委員会編)
- 古典研究会叢書第二期 第2、4、27回(山岸徳平、等解題)
- 古典研究会叢書別刊第二—三巻(橋本不美男、他解題)
- 芳野本義経記(山岸徳平解題)
- 狭衣物語上・下(同右)
- 判官物語(同右)
- 源氏物語の研究——創作過程の探求——(小山敦子著)
- 笠間選書、1—17、19—24、26—36、37(小玉晃一、他著)
- 笠間索引叢刊、17、30、37、41—49(馬淵和夫、他編)
- 人物探訪、日本の歴史7(坪田五雄著)
- 良寛の思想と精神風土(長谷川洋三著)
- 近世文藝思潮(中村幸彦著)
- 日本漢文学史論考(山岸徳平著)
- 中世文学論考(福田秀一著)
- 難後拾遺集(関根慶子著)
- 源氏物語論(日加田さくを著)
- 天理図書館四十年史(天理図書館編)
- 長谷寺編年資料(川田聖見、他著)
- 日本古典文学全集、源氏物語五(阿部秋生、他著)
- 天理図書館三十周年寄稿文集(天理図書館編)
- 未翻刻、宝曆、江戸小説三種(花咲一男編)
- 川柳雑俳江戸の魚つり(同右)
- 川柳雑俳江戸の出合花屋(同右)
- 未翻刻、明和天明、珍本六種(同右)
- 漢文体笑話ほん天明(武藤積夫編)
- 未翻刻江戸小咄本八集(同右)
- 未翻刻江戸小咄本十一集(同右)
- 未翻刻安永期上方咄会本、六種(同右)
- 川柳浄瑠璃志(大村沙華編)
- 絵本見立百化鳥(尾崎久弥編)
- 続絵入川柳妖異譚(綿谷雪編)
- 葛飾北斎挿画本集(向井信夫編)
- 未翻刻絵入江戸小咄十二種(宮尾しげを編)
- 未翻刻狂詩九種(浅川征一郎編)
- 校注枕冊子(田中重太郎著)
- 論集上代文学、第四、五冊(萬葉七曜会編)
- 文章表現法大要(今井文男編)
- 国語文法論(渡辺実編)
- 大磯石神台配石遺構発掘報告書(東海大学石神台遺跡発掘調査団著)
- とはずがたり(松本幸至著)
- 新注校訂土佐日記(鈴木知太郎、他著)
- 新校訂土佐日記(同右)
- 校注源氏物語(中野幸一著)
- 校注今昔物語集新選(馬淵和夫著)
- 笠間選書、39—51(池田利夫、他著)
- 寂蓮法師全歌集とその研究(半田公平著)
- 俳優——日野研一郎詩集——(日野研一郎著)
- Yone Noguchi Collected English letters (Ikuo, Atsune)

